

環境政策に影響を与えるにも関わらず、原子力発電に反対する人々へ：

Nov. 3, 2013

私たちは地球規模の気候変動に関わる気候・エネルギー学者として、より安全な原子力エネルギーシステムの開発と導入に賛成していただけるようにと、この文章をしたためました。皆さんの団体の、地球温暖化への懸念と再生可能エネルギーへの支持に私たちは敬意を表します。しかし、いままでのように原子力発電への反対を続ければ、危険な気候変動を回避する人類の能力が脅かされることになります。

気候変動問題に対処する実践的な手段としての、より安全な原子力発電システムの開発と普及に、皆さんの団体が賛成されるよう私たちは要望します。世界のエネルギー需要は急速な伸びを示しており、途上国のニーズを満たすべく成長を続けるに違いありません。一方で、温室効果ガスの排出量を劇的に削減する必要があることも、ますますはっきりしてきています。エネルギー供給を増やししながら温室効果ガスの排出量を減らすには、大気をゴミ捨て場として扱わないような発電所を作ってゆくしかないのです。

風力や太陽光、バイオマスなどの再生可能エネルギーは、確かに将来のエネルギー経済の中で重要な役割を果たすでしょう。しかし、これらのエネルギー源は、世界経済が必要とする規模で安価で信頼性の高い電力を十分に供給しうるほど、急速に規模を拡大させることはできません。原子力発電なしで気候を安定させることは、理論的には可能かもしれませんが、現実世界において原子力発電抜きで信頼性のある方針はあり得ないでしょう。

私たちは、現在の原子力発電所は完璧にはほど遠いものであると理解しています。幸い、受動的な安全システムやその他の進歩によって、新しいプラントはもっと安全にできます。現代の原子力技術は、発生する核廃棄物を燃焼させ、核燃料をもっと有効利用することによって、核拡散リスクを減らすことができます。技術革新と規模の経済性によって、新規のプラントは既存のものよりはるかに安価にできるでしょう。こういうメリットがあるにしても、原子力は社会的な便益という観点から、奨励される必要があります。

定量的な分析によれば、原子力エネルギーの利用拡大に伴うリスクは、化石燃料に伴うリスクよりも桁違いに小さいのです。欠点のないエネルギーシステムは存在しません。エネルギーシステムの決定を事実に基づいて行うように、21世紀の原子力技術に当てはまらない感情論や偏見によって決断しないように、私たちはお願いしたいのです。

技術的な特効薬は存在しません。しかし、地球温暖化の脅威を真剣に受け止め、大気をゴミ捨て場にする事のないエネルギー技術の開発にとっての重要な選択肢の一つとし

て、安全な原子力技術の開発と普及に賛成する人々にとって、機は熟したと言えるでしょう。

地球はどんどん温暖化し、二酸化炭素排出量はこれまでになく急速に上昇していますので、炭素排出量の大部分をなくせる可能性を秘めた技術を放棄する余裕は、私たちにはありません。1970年代以降、様々な変化がありました。21世紀の原子力発電に対する新しい取り組みを行う時期が来たのです。

気候変動のリスクについて真剣な懸念を示すとともに、進歩的な原子力技術の開発と普及に賛同していただけるよう、皆さんの団体をお願いいたします。

敬具

ケン・カルデイラ博士(Dr. Ken Caldeira)、カーネギー研究所、グローバルエコロジー学科主任研究員

ケリー・エマニュエル博士(Dr. Kerry Emanuel)、マサチューセッツ工科大学、大気科学者

ジェームズ・ハンセン博士(Dr. James Hansen)、コロンビア大学地球研究所、気候科学者

トム・ウィグリー博士(Dr. Tom Wigley)、アデレード大学と国立大気研究センター、気候科学者

(訳：朴勝俊。オリジナル英文は下記からダウンロード可)

<https://plus.google.com/104173268819779064135/posts/Vs6Csiv1xYr>